

書 評

Eleanor Courtemanche, *The 'Invisible Hand' and British Fiction, 1818–1860 : Adam Smith, Political Economy, and the Genre of Realism.*

New York : Palgrave Macmillan, 2011, xi+251pp.

坂 本 幹 雄

経済学徒として、ひとえに「見えざる手」と「アダム・スミス」のタイトルに魅かれて本書を読んだ。著者はイリノイ大学准教授、研究分野はヴィクトリア朝研究のほかドイツ小説、物語理論等。本書は、大まかに言えば経済学と文学の学際研究であり、英文学者によるスミス研究・資本主義論である。もう少し詳しく言うと、本書は、文学の視点からスミスを読むのではなく、また経済思想史を中心に描くわけでもなく、文学における経済思想、経済思想の文学への影響を考察した書である。文芸批評において現在、盛んな分野に掉さず研究である。本書は、経済学（全体を通して「ポリティカル・エコノミー」の語）を導入しつつ、19世紀ヴィクトリア朝のリアリズム小説の文芸批評を展開している。その「パンテージ・ポイント」になっているものが、スミスの「見えざる手」のメタファーである。

*

本書の構成を見ることにしよう。序章「資本主義道徳哲学、物語技術および国境線」について、以下の2部構成をとっている。第Ⅰ部は「アダム・スミスを読む」と題して、1章だけからなる。第1章「想像的視点：見えざる手と経済学の勃興」は、スミスの原典解釈と18世紀末から19世紀前半の経済思想史にあてる。『国富論』、『天文学史』、『道徳感情論』の順に3つの「見えざる手」に再解釈を敢行し、パークの保守主義、ベンサム功利主義、マルサス等のキリスト教経済思想とスミスとの比較思想論を展開している。第Ⅱ部は「19世紀初期の小説と見えざる手の社会理論」と題して、次の4章からなる文芸批評である。第2章「全知の語り手と『ノーサンガー・アベイ』、『荒涼館』におけるゴシック回帰」、第3章「摂理の結末：マーティノー、ディケンズ、経済学の教育的課題」、第4章「『虚栄の市』における波及効果と戦争の霧」、第5章「ギヤスケルとエリオットにおける不適切な共感」。そして最後に「結論」となっている。

以上のように本書はスミスの原典の「見えざる手」メタファーを緻密に再解釈したうえで、著者独自の「見えざる手の社会理論」に拡張して提示し、そのフレームワークの中で、「自由主義」（たとえばイアン・ワット『小説の勃興』（1957））、マルク

ス主義 (たとえばフレデリック・ジェイムソン『政治的無意識』(1981))、「新経済批評」の3つの手法・要素を取り入れつつ、美学的・認識論的・歴史学的にヴィクトリア朝のリアリズム小説の分析を展開している。

*

「見えざる手の社会理論」は、大略、次のような構図となっている。スミスの「見えざる手」メタファーは、楽観主義的であり、時空・国境・因果関係があいまいで複雑な概念である。スミスの「見えざる手」メタファーは、「統治者と商人の相互に排他的な視点の不安定な複合」と両者の立場の本質的な「無知」を理解できる「全知の理論家」からなる概念としてとらえられる。これに対して小説こそがスミスの「見えざる手」メタファーのあいまいで複雑な概念を明確にして、よりいっそうの社会理解の基礎に資するものとなる。小説は「登場人物の「虫の眼」と語り手の「鳥の眼」の間のダイナミックな相互作用」(3頁)を描いて複雑な社会全体を把握する力をもっている。この小説による「見えざる手の社会理論」は、「全知」「無知」「意図せざる帰結」(「偶然性」「アイロニー」)(13頁)の「3つのカテゴリー」を含むものである。

小説は、「経済学により示唆された道徳世界」の限界突破をはたして、スミス理論では解明できなかった地点まで進むことができる。しかしそこには「本質的な物語のディレンマ」が待ち受けている。『『ノーサンガー・アベイ』のゴシックとリアリズムのジャンルの交替、『荒涼館』の全知と第1人称の語りの分裂、『経済学例解』の自由意志と決定論の間の緊張、『ハード・タイムズ』の敵対的な袋小路、『虚栄の市』の小説をどこまでも引き延ばそうとする葛藤、そして『メアリー・バートン』と『フロスの水車場』の過剰な共感の語り手、これらすべてが「見えざる手の社会理論によって生み出された未解決の時空の混乱に対する革新的対応」(13頁)である。ちなみにこれで本書の小説の主要テキストがすべて網羅されている。

*

本書の物語分析は、練達の職人技の冴え、といったところだろうか、読書人として面白く読めた。しかしそうすると言いかえてみれば、別にあえて見えざる手メタファーを入れなくとも、成立する分析ではないかとも思ってしまった。

ここでは経済学徒として、本書に論評を加えたい。本書は、「見えざる手」が資本主義を正当化した(5頁)という資本主義論であって、スミスの「見えざる手」のメタファーを援用しているわけである。この点が、本書全体を通して、時々、気になって仕方がなかった。著者は「『資本主義』ということばの私の使い方」(4頁)について十分に留意しているのだが、たとえば「スミスの資本主義の利益に関する道徳的結論」(61頁)というようにアナクロニズムの感が拭いがたい。

第1章は、ケネーのスミス経済学形成への影響から、「天文学史」のデカルト渦動理論を重視した解釈へと至る構成をとっている。巧みつなぎ方だなど思ったが、途中、お馴染みのジグザグの経済表が出所不明であるが引用掲載されている(40

頁)。コピー貼付するような安直なことはやめてほしい。どうしても必要ならば(立論上、そうとも思えないが)、自分でその範囲で作成すべきである。水増ししているようで、とても印象が悪い。立論上、「見えざる手」の引用は、どのように切り取って見せるのか、大部の引用となっても絶対必要であるが、ケネーはそうではない。

第4章の前半は、ポール・オームロッドの『バタフライ経済学』(1998)、複雑性経済学、ハイエクの自生的秩序論、カオス理論、ナシム・ニコラス・タレブの『ブラック・スワン』(2007)、マーク・テイラーの『信頼ゲーム』(2004)等々、次々と説明しだすという他の章にはない唐突な感がある。ただし面白い。どうしてもバタフライ効果と「ラック・パンチ」、「戦争の霧」(クラウゼヴィッツ)をつなげたかったのだろう。

「結論」は迫力がない。やはり本書の白眉は、第2部の物語分析である。なお結論部分でもマルクスが相当高く評価されていて印象的である。

*

本質的な論点に入ろう。スミスからアプローチするなら、「見えざる手」を中心に据えるのではなく、もっとスミス思想全体からアプローチした文芸批評とすべきではないかと思った。またスミス以後の古典派経済学の思潮となれば、「見えざる手」に焦点をあて続けて制約されない方がよいとも思った。本書はスミスの思想体系を見えざる手メタファーを中心に据えて、摂理論・楽観主義の世界に還元してしまった。拡張した「見えざる手の社会理論」によりリアリズム小説の世界を分析して、文学の世界はスミスの世界よりも豊かに多元的に複雑な社会を把握していると説く。なるほど文学の力はわかるが、実はスミスの世界もまた文学の世界と同様に豊かで多元的である。スミス思想の眼目を見えざる手メタファーに還元した本書の戦略のために、この点が見失われてしまった。なぜそうってしまったのか、冒頭の宣言(1頁)が示唆するように、研究は固執しなければ始まらないとしても、「見えざる手の社会理論」のアイデアの閃きに囚われたことによるものなのか、マルクス主義的進歩史観のためか、その他ののか、この点はよくわからない。

ともかくスミスは「見えざる手」以外にも重要なメタファーを多用しているし、また『道徳感情論』の第6版改定内容の深刻なテーマに見られるように、本書が説くほどスミスの世界は単純ではない。スミスにも文学者たちと同じように、あるいはそれ以上にディレンマがうかがえる。

物語分析のようにスミスの著作も分析すればよい。そうすれば別の地平が見えるはずである。そのうえで、小説の分析にスミス思想からアプローチ・適用するのが本筋であると思う。いつもながら言うは易く行うは難しであるが、そう思う。翻って文学からの経済学への貢献を考えた場合にも、本書の「見えざる手の社会理論」の分析の有効性を否定するものではないが、やはりもっとスミス思想全体から文学を照射し、経済学へとフィードバックするプロジェクトとしていくべきだろう。